

● 高齢者の自動車運転能力は維持・回復できる・・・ －行動分析からの“自覚⇄修正のシミュレータ”の提案－	2
● 戦後日本における地域教育計画論の研究…………… －矢口新の構想と実践－	6
● 随想「我が師—その3」……………	8
● JADECからのお知らせ……………	10

巻頭言

あずみ
安住さんの授業

安住さんというのは、最も人気のあるアナウンサーとして不動の地位を占める TBS のアナウンサー安住紳一郎さんのことである。たまたま見た TV 番組「ぴったんこカンカン」に、その安住さんが明治大学の斎藤孝教授と一緒に出ていた。日本語能力や読書文化の重要性を訴え、「声に出して読みたい日本語」など多くの著作がある教育学者斎藤さん、明治大学文学部出身の安住さんはその教え子だったという。斎藤さんが担当する明治大学の講座に先輩である安住さんを連れて行く、というのが番組のその日の企画であった。

安住さんは、今まで見てきた中で最も優れたプレゼンテーション能力を持つ学生だったと斎藤さんは語る。ある時、学生に短い授業をやってみろと課題を出したが、誰も手をあげない。斎藤さんが「教師を目指そうというものが、たかが数分のプレゼンもできないのか！」と叱咤したところ、出てきたのが安住さんだった。語り始めた安住さんは、そこから 40 分間滔々と日本語についての講義を展開した。そのあまりの素晴らしさに教室にいた全員が、終わった瞬間に立ち上がって拍手を送ったという。「人の前でプレゼンをするのが天職だと思った瞬間だった」と述懐する安住さん。

大学に到着し、学生たちに拍手で迎えられた安住さんは、斎藤さんに指示され学生の間席に坐る。この日の課題は、太宰治の『走れメロス』をテーマにして 5 分の授業を展開するというもの。まず学生の何人かが数分ずつ自分なりの授業を展開する。紙芝居を使って行うなどの工夫はあったが、内容はいずれも物語の展開もしくは登場人物の心理の解説で、参考書に出ている程度だ。そして最後に安住さんの登場。

安住さんは、日本語の面白さをとらえるには「走れメロス」は大変良いと語り始める。そして、太宰の文章表現をとらえる視点をいくつか紹介する。文章の一部を読んで見せ、そのリズム感と言葉の独創性は、博報堂のキャッチコピーにも匹敵すると語る。なるほどとうなずく学生たち。

つづいて、太宰がメロスの走る速度を「沈みゆく太陽の 10 倍の速度で走った」と表現したことについて語る。ありきたりの「目にもとまらぬ」や「風を切って」ではない個性的な表現、しかし「太陽の 10 倍の速度」とはいったいどんな速度か。作家であり明治大学理工学部講師である「空想科学研究所主任研究員」柳田理科雄氏が計算したところによる「太陽の 10 倍の速度」のデータを使って解説する。

「太陽は動かない。つまり太陽の速度というのは地球の自転の速度、であるから時速 1300 km。これは新幹線の 44 倍の速度、100m 走だとどのぐらいか。世界最速の男ウサイン・ボルト、彼は 9.69 秒で走る。ではメロスは？ なんと 0.02 秒！」黒板に忙しく板書しながらの解説に笑いが巻き起こる。「そして、このスピードで走れば周辺 2 km 四方には衝撃波がおこる。凄まじい風と音、物は破壊される。だから、『走れメロス』ではなく『走るなメロス』 爆発した笑いの渦の中に、ありきたりでない独創的な表現の面白さをとらえることが、国語、また文学の魅力であること、そしてそれを子どもたちに伝えることが教師の仕事であることを感じさせて、安住さんの 5 分間の授業は終わった。

(研究開発部 矢口みどり)

★行動分析からの“自覚⇔修正のシミュレータ”の提案 高齢者の自動車運転能力は維持・回復できる

研究開発部

■増加する高齢運転者の事故、行政の対策は免許返上の促進 その理由は・・・

高齢者の増加に伴って高齢運転者の事故が増えている。今後その傾向はますます進むと予測されるが、国土交通省や警察庁は高齢運転者の訓練には消極的であるように思える。

高齢者の運転事故には、加齢による身体機能や認知・判断能力の衰えが深く関係しているとして、国は70才以上の免許更新者に対して「高齢者講習」を実施、身体能力や認知機能の検査と運転能力の適性診断を行い、問題がある運転者には免許返上を促している。しかし大きな成果は得られず事故が増え続けているため、今後、新しい検査方法を導入しその方向を強化するようだ。その背景には「高齢運転者への訓練効果は持続しない」「高齢運転者に対して訓練をすることは運転能力への過信を生み、事故を逆に増やす可能性がある」という交通心理学の知見があるという。

高齢者講習風景



■高齢化社会だからこそ、高齢者の運転能力維持・回復が必要

しかし我々は、高齢化社会が進行するからこそ、高齢者の運転能力維持・回復の手だてを考える必要があると考える。高齢化が進んだ社会においては、高齢者にはできるだけ元気で自立した行動ができるようになってもらう必要がある。移動手段である自動車の運転免許返上策は逆効果、社会参加の幅を狭めることになり、高齢者の能力を低下させることにもつながっていく。

高齢者の脳や身体の機能については、最近研究が進み、必要な刺激を与えることにより十分回復するばかりでなく、成長する可能性さえあることが明らかになってきている。高齢者講習の取り組みを、高齢者が自己の運転行動を修正するという行動にどう結びつけるか、その内容方法を検討すべきだと考える。

■行動の修正は、自分の行動の問題点を自覚するところから始まる

高齢者の運転能力低下を防ぐ、あるいは低下した運転能力を回復するには、高齢者自身が自分の運転のしかたを修正する行動が必要である。しかし、何をどう修正するのか、また修正する必要があること自体を自覚できなければ、その行動は生まれにくい。

高齢者の運転能力の低下は、加齢による身体機能や認知・判断能力の衰えが関係しているというが、それは少しずつ進行するものであって自覚しにくいばかりか、運転行動にどう影響してくるのか具体的にはわからない。高齢者講習時に行われる検査は動体視力、瞬間認知反応力など、そうした身体機能を調べるものであるため、その衰えを指摘されても、運転行動を修正する必要があるまでには至らない。だから自分の運転を修正する行動が生まれにくい。この問題こそを解決すべきではないか。

■問題解決のための3つの視点

高齢者が自らの運転能力を正しく自覚し、修正する行動に取り組むようになるためには何が必要か。その問題を解決するためのポイントは、3つほど考えられる。

- 他人が評価するのではなく自己診断で能力低下が自覚できるようにする
- 「身体機能」ではなく「運転能力」の低下として自覚させる
- 自覚⇔修正の場をつくる

先行研究では、高齢運転者には自分の運転能力に対する過信があることが報告されている。高齢者講習を

担当した教習所指導員への聞き取り調査でも、実車運転で問題点を指摘すると怒る高齢者が多いことがあげられた。高齢運転者の多くは運転歴が長い。何十年と運転をしてきた人で、自分の運転技術には自信を持っている。そのため検査で多少の身体機能の衰えが指摘されても経験でカバーできていると思っているのである。

そうした高齢運転者には、警察官や指導員等から指摘されるのではなく、自身が運転能力の低下を認識できるようにする必要がある。そしてその認識は、身体機能レベルの低下ではなく、運転能力の低下としてはっきり捉えられるようにする必要がある。

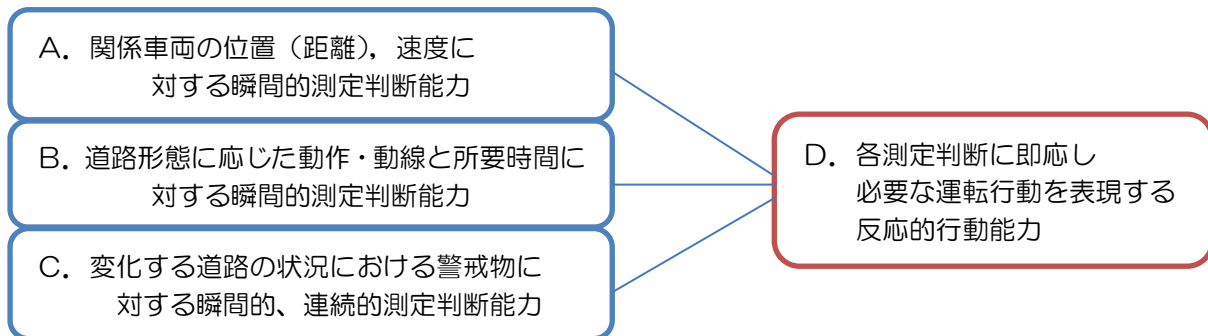
自覚ができたらつぎは、行動の修正である。日常の運転行動の場で修正することが可能であるか、それとも、新たな訓練の場が必要になるか、それは修正すべき行動の内容によって決まる。

■自覚させるべき“運転能力” — 行動分析による抽出

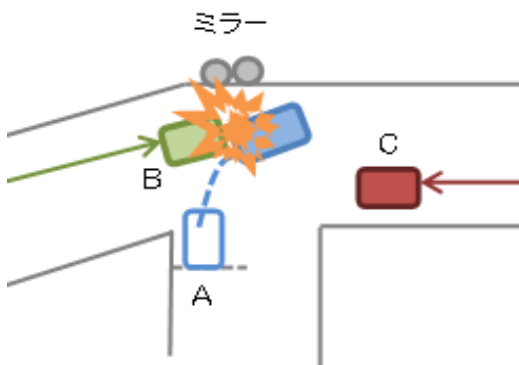
では、加齢により低下している運転能力とはいったいどのような内容なのか。運転者が運転能力の低下を自覚できるようにするためには、運転行動をどういう行動の単位でとらえるかということが問題になる。身体機能レベルではなく、明らかに運転行動を構成する要素であると、高齢運転者に自覚できる単位にすることが必要である。

我々は、事故例における高齢運転者の行動を分析することにより、それをとらえることにした。高齢運転者の事故でもっとも多いのは「交差点」における事故である。事故全体の6割を占める。その中で最も多いのが「信号のない交差点」での事故。交差点事故の6割を占める。ここに高齢運転者の運転行動の特性が表れている、つまり加齢により低下する運転能力の要素があると判断したからである。

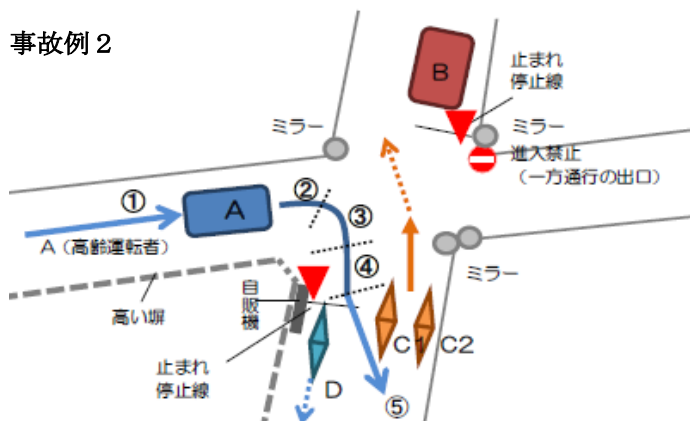
そしてその分析から、高齢運転者に自覚させるべきものとして抽出した運転能力が次の4つである。



事故例1



事故例2



事故例1は、T字路を右折する高齢者Aが、左右から接近する車BとCを確認し右折を開始したが、左から来たBに追突された事例。追突の責任はBにもないわけではないが、根本的な原因はAがBの位置（距離）や速度の測定を誤ったか、A自身の右折行動の速度を誤ったかのどちらか、或はその両方と考えられる。

事故例2は、自転車2台が進入しつつある交差点内に、高齢者Aが右折しようとして進入、一時停止せずハンドルを右に切って自転車を避けたところ、自転車Dに衝突しそうになり、今度はハンドルを左に切って

避けたといういわゆるヒヤリハット事例。最大の原因は、交差点進入時の警戒物の測定を怠ったことであるが、刻々と変わる状況に対して適切な測定判断ができず展開を悪化させた、一般にいうパニック行動である。

これらの事故例における運転者の行動を、行動の分節ごとの測定判断とその測定判断に対応する行動という視点で分析した結果、交差点を安全に通過するための運転能力は、3つの瞬間的判断能力（A、B、C）と、それに即応した反動的行動能力（D）から構成されており、事故の原因は、それらの能力の低下もしくは欠如（怠ったということも含めて）であるととらえることができた。

この4つは、運転行動を成立させるための最も重要な行動要素であり、交差点事故ばかりでなく、その他の事故でも重要な要素となっている。高齢者が自覚すべき運転能力として第一に挙げるべきものと考えられる。

■「自覚⇔修正」ができる場としての訓練シミュレータ

本研究では、自覚すべき運転能力として抽出した4つについて、それを自覚（自己診断）するための装置として、次ページに示した2つのシミュレータを構想した。

運転行動の場の測定判断能力の自己診断は、運転者自身が実感するものでなければならないため、できるだけ現実の運転行動での測定判断に近い条件で行う必要がある。そのため、提示画像はすべて実写映像とした。画像の大きさについては、40インチ程度で十分実感をもって診断できることが分かった。それ以下でよいかどうかについては検証が必要と考える。

①は 位置・速度に対する測定・判断能力の自覚 のためのシミュレータ で、運転能力のA、Bについて測定するものである。あらかじめ計測しておいた実車運転での行動時間と、自分の測定判断結果とを比較し、自分の行動時間に見合った測定判断ができているかどうかを診断するものとした。

②は 道路状況に対する測定判断能力の自覚 のためのシミュレータ で、運転能力C（ベースにはA、Bも含まれる）の測定判断能力と、Dの反動的行動力を自己診断するものである。この装置では連続した静止画による行動場面の提示を原則とする。実際の行動場面では、的確に行動する運転者は、漫然と対応しているのではなく、測定判断すべき時点、時点を自分自身で区切って、全体の状況とその展開を予測しつつ、その時点での最優先の警戒対象に対して必要な行動をとっている。そのため静止画を選択し、その時点その時点における警戒対象に対する測定判断とその対応の場を体験させることとした。

①②のシミュレータはどちらも診断後には、行動を修正するための訓練シミュレータとしても活用できる。訓練プログラムに現実の運転の場の要素を組み込めば、よりリアルな場における行動が訓練できる。提示事例は単純な行動から複雑な行動へ、警戒対象の少ないものから多いものへと組み立てる。車両条件の組み合わせや、信号のある交差点、複数車線の交差点、さらに道路幅など道路の条件、夜間、天候など環境条件も加えた総合訓練プログラムを考えてもよい。

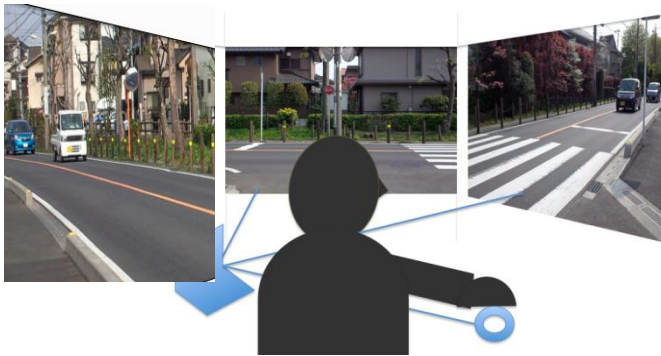
刻々と変わる道路状況には、車の後方の状況もある。提示画面に、バックミラー、サイドミラーの情報を入れば、進路変更の事例も可能となる。教習所の周辺で撮影した動画を準備し、高齢者講習と組み合わせで行うことも効果的ではないかと考えている。

■終わりに

これまで高齢者に対する訓練の効果は疑問視されてきた。我々は、その原因は高齢者ではなく教え方にあると考えている。自分の能力を自分自身で診断し自覚することができれば、高齢者にも行動を修正する意欲が生まれ、主体的に訓練に取り組む姿勢ができる、訓練シミュレータの可能性はそこにあると考えている。

★これは、一昨年から取り組んできた研究（平成24年度新技術振興渡辺記念会助成研究）の概略報告である。詳細については近々JADECレポートとして報告する予定であるが、この研究はまだ研究の過程にあり、検証が不十分なところが多々ある。ご意見、ご指摘いただければ幸いです。

① 位置・速度に対する測定・判断能力を「自覚⇔修正」するためのシミュレータ



<提示の機能と内容>

- ・ PCと連動する3台の液晶モニター（またはプロジェクターによる投影）
- ・ 交差点の状況を動画で提示（左写真はT字路の例）

<入力機能>

- ・ 被験者が反応する押ボタン（または専用コントローラ）

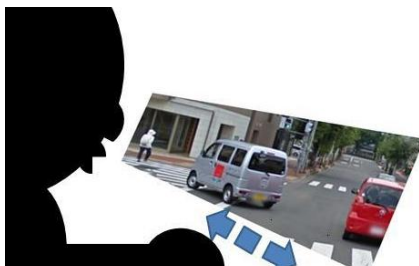
<準備> 被験者が実車で計測した右折左折の所用タイムを入力する。

<診断> 被験者は接近する左右の車両の速度と距離を測定判断、自車が進入を開始するタイミングでボタンを押す。コンピュータが車両の時間・距離から安全を判定、結果を音声と表示で知らせる。

<修正行動>

システムの判定を参考に自覚・修正を繰り返し、最適なタイミングを体得する。

② 道路状況に対する測定判断能力を「自覚⇔修正」するためのシミュレータ



<提示・入力>

- ・ 交差点内進入～通過（直進、左折、右折）までの場面を5～10段階に分解した静止画の連続再生。さまざまな警戒対象を提示する。
- ・ 提示された場面で最優先の警戒対象物の選択と、対応のしかたを選択できるようにする。

警戒物の選択

進む 徐行 一時停止 の選択

<診断>

診断する内容は、正しい対応であったかどうか、および、対応の速度、本来の行動速度と同程度で正しく対応できたかどうかを診断する。

<記録>

被験者の反応を記録、診断する機能を搭載すれば運転行動を客観的、定量的、総合的には把握できる。

①



②



③



④



戦後日本における地域教育計画論の研究

― 矢口新の構想と実践 ―



2014年2月、博士論文の公刊にあたって

こし かわ もとむ
越川 求

本書は、博士学位請求論文「戦後日本における地域教育計画論の研究―矢口新の指導による実践を中心に―」（2013年3月、立教大学大学院文学研究科に提出、2013年9月、教育学博士の学位を取得）を、単著として公刊したものです。公刊に際して表題を『戦後日本における地域教育計画論の研究―矢口新の構想と実践―』と改め、本文に必要最小限の加筆・修正を行い、巻末資料については大幅な削減を行いました。立教大学大学院文学研究科教育学専攻において、後期博士課程6年間にわたり、私が行ってきた研究の成果をまとめたものです。

今から10年ほど前、私が中学校教諭として25年目を迎え、社会科や特別活動などを中心に自分の住居のある埼玉県坂戸市内で教員生活を送っていたころ、「自分が受けてきた教育や行ってきた教育実践をふり返り大きな視点で考える」とともに「これからの教育の方向を考えてみたい」という漠然とした気持ちが生まれていました。偶然にも郵便局で見つけた放送大学大学院の募集要項が目にとまり、研究生生活が始まりました。

「学校と地域との連携」に今後の教育の改善の可能性を期待し、修士論文において〈協働学校〉論を提起し、さらに研究を深めるため立教大学大学院に入学し博士論文に取り組みました。研究テーマは、コミュニティ・スクールや地域の教育計画の成立から発展・衰退の経過を歴史的に検討すること。そこで、戦後教育改革期に地域の「民主化」と「復興」にとりくんだ地域教育計画論を研究対象とし、戦後社会科成立の先駆的実践であり代表的な地域教育計画とされる埼玉県「川口プラン」から検討していくことにしました。

中央教育研究所が中心になって研究を進めた「川口プラン」については多くの先行研究がありましたが、同研究所の第2の実験プランである埼玉県「三保谷プラン」については全くといってよいほど研究されていませんでした。中央教育研究所の研究活動については、戦前からの教育学者で日本教育学会長を長く務め戦後の教育界に大きな影響を与えた海後宗臣が研究部長をしていたにもかかわらず、これまで教育史的な位置づけはなされていなかったのです。

三保谷は坂戸市の隣の川島町にあり、自宅から車で1時間足らず、もってこいの場所でした。その三保谷で、中央教育研究所の中心メンバーで、研究誌『教育科学研究』の代表者である矢口新という研究者を発見したのです。資料の調査と関係者宅に訪問し聞き取りをおこなった結果、村の民主化を地域教育計画により実践した矢口を中心とした研究者たちの足跡に、大変驚きました。

この時までの矢口についての私のイメージは、民意に逆行した「富山県の七・三体制」を推進した人物というマイナスの言説によって覆われていました。

しかし、矢口の執筆した1940年代から50年代の膨大な論稿を検討していくと、矢口が戦後の民主教育の推進に大きな役割を果たし、影響を与えていたことがわかりました。実際に現地の資料にあたり、聞き取りをする中で歴史的な事実に近いという気持ちが大きくなっていきました。

矢口が指導した茨城県水海道小学校や富山県北加積小学校に残されている資料の整理や当時の教員の方々へのインタビューからは、1950年代から60年代の教育実践の生き生きとした姿が浮かび上がってきました。国立教育研究所や各地域の教育研究所の関連で、1950年代に地域を建設する実践が質的にも量的にも発展

していったことに確信をもちました。

大田堯の指導した広島県の「本郷プラン」で地域教育計画は終焉したという従来の通説を変更し、戦後地域教育計画論の内実を明らかにしなければならないと考えました。矢口の指導してきた実践は、地域教育計画論を原点にして、戦後のカリキュラム構造や社会科、自治活動という戦後教育の基礎を形成するものであり、さらに富山県総合教育計画も教育実践的な視点から再評価しなければならないということを、強く思うようになっていきました。

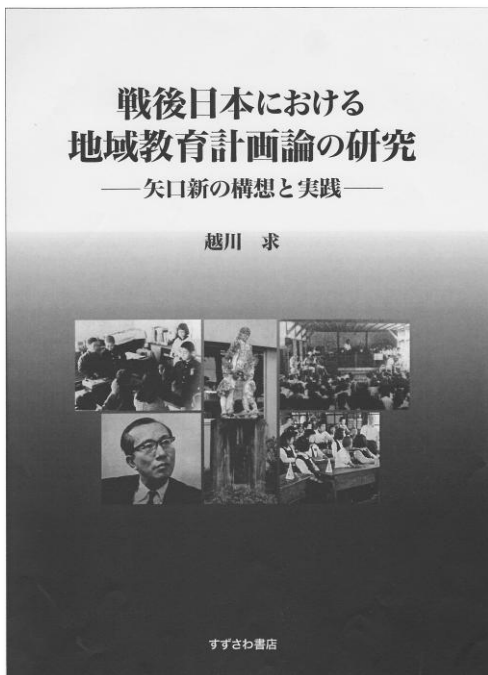
海後・矢口という、戦後教育史の中で今までまったく見落とされてきたこの系譜における地域教育計画論の歴史的意味を明らかにしなければ、戦後教育の歴史的構造は解明できない、またコミュニティ・スクールについても論じられないと考え、更に研究を進めていきました。

そして最後に、地域教育計画論成立に関する戦前からの連続性を明らかにし、矢口の研究活動と実践の今日意味を位置づけ、本研究のまとめとしました。

本書の研究は、「三保谷プラン」の中心者の矢口新を発見した時の衝撃と感動が原動力となりました。すぐさま連絡をとり、矢口新の娘夫妻（矢口みどりさん・榊正昭さん）及び小澤秀子さん（矢口の片腕的存在で現在は矢口の設立した(財)能力開発工学センターの理事）と共に、“矢口教育学研究会”を後期博士課程1年時に立ち上げたことが、本研究の推進に大きな力となりました。矢口の文献調査や茨城県や富山県での現地調査と聞き取り調査は、この研究会がなかったらとても推進できるものではありませんでした。2年目からは、日本教師教育学会で立教大学前田一男教授から紹介していただいた横浜国立大学金馬国晴准教授も参加され、共同調査や議論を積み重ねてきました。この研究会も、今年で7年目を迎えました。

本著の公刊にあたり、能力開発工学センターの関係者および矢口教育学研究会で調査に協力いただいた茨城県常総市立水海道小学校関係者、富山県滑川市立北加積小学校関係者、富山県総合教育計画関係者等に、あらためて心より感謝を申し上げます。

矢口新の教育遺産を継承しようとする人々、戦後教育を再評価しようとする人々、さらには今後の日本の教育の改善に尽くそうという多くの人々に、本書を読んでいただければ幸いです。



[越川求氏略歴]

1978：東京大学教育学部卒

1978～2011

埼玉県公立中学校教諭として坂戸市内中学校に勤務

2005：放送大学大学院文化科学研究科修了 修士学位取得

2013：立教大学大学院文学研究科後期博士課程修了
教育学博士学位取得

* 事務局からのご案内 *

能力開発工学センターにお申込みいただければ、定価（本体4800円＋税）を、著者割引価格4000円（税込、送料別）でお届けすることができます。ぜひ御一読ください。

申込方法：電子メール、FAX、郵便

申 込 先：最終ページの奥付をご覧ください。



元富山県総合教育センター所長 米島 秀次*

「今日の自分があるのは、自分自身のこれまでの幾分かの学習と努力もあるが、それは何ほどのものでもなく、その数倍の大きな要素は、これまでに多くの方々との出会いがあったからこそ。」
教員生活を平成11年3月に終えた同期のものが集った折に、その中の一人が語ったこの言葉から、我が来し方に思いを馳せ、特に長く教育に携わってきた教員としての素養を培い、育てていただいた「我が師」について述べてきたその最終回、人生の方向を示してくださった吉島先生と、教育改革の方向を示してくださった矢口先生、お二人について述べたい。

★ 吉島敬重先生

・・・人の道を説き、岐路に立つ度に進む道を拓いていただいた

私が人生や自分の将来について考えるようになったのは、高校に入ってからである。当時よく旧友と論語の為政編「子曰く、吾十有五にして学を志し・・・」などを引き合いにしながら、「人生とは・・・」などと真剣に議論を戦わした。この孔子の述懐を、単なる中国の故事物語としてとらえるのでなく、「人生の生き方」であると説かれたのが、高校の副担任であった吉島先生である。先生は、「生きるとは、常に夢をもって行動すること」であり、「行動がさらに明日への夢を育んでくれる」と諭されるとともに、「人の価値は、知識の量ではなく、何ができるかである」と機会あるごとに話された。特に「人は20代までは自分のため、その後は家族のため社会のために生きること、それが人の道である」と言われた言葉が、今も深く心に刻まれている。

家庭の事情から進学をあきらめていた私に、東京に出て志を成し遂げよと、強く背中を押して下さったのも先生である。私はその後も、人生の岐路に立つ度に先生を訪ね相談に乗っていただき、進むべき道を拓いていただいた。

★吉島敬重（1925～2000）

元富山県立入善高校教頭。36年の教員生活の後、黒部川扇状地研究所の設立に尽力され、その後所長に就任。

★ 能力開発工学センター 矢口 新 所長

・・・教育の改革と学習の個別化を提唱された

昭和38年、家庭の事情により、余儀なく木戸電気をやめ帰郷しなければならなくなった。そこで高校の恩師吉島先生を訪ねたところ、工業科の教員への道があることを教えられた。翌年4月、幸いなことに教員に採用され工業高校の教壇に立つことができた。学校での授業は初めてであり不安もあったが、学科主任の指導を受けながら少しずつ自分なりに満足できる授業ができるようになり自信もついてきた。

しかし、学年末の成績評価をする頃になって、これまでの学校での日々の授業や進路指導に対し、疑問を持つようになってきた。それは、就職を目前にした生徒に対し、教師（私も含め）が「授業＝知識の注入」

「勉強＝記憶すること」「成績＝知識の量＝生徒の能力」と思わせるような指導を行ってきたのではないかということである。

そうした時期に、(財)能力開発工学センター所長・矢口新氏の「教育の革新」に関する講演を聞き、その教育思想に共感を覚えると同時に強く心を揺さぶられた。氏は、昭和 26 年より富山県勢総合開発計画の教育計画委員を務められ、富山県教育に深くかかわってこられた教育学者であり、「教育の革新＝脳科学を土台とした行動形成」を提唱され、矢口教育学と呼ばれた「行動の形成を目指す能力開発の理論と方法」を確立された。

また、氏が設立された(財)能力開発工学センターでは、児童生徒や働く人々の能力開発に関する実践的な研究を行い、教育システムの開発や普及に努めるとともに、学校および企業の教育担当者の育成事業も行っていった。そこで、矢口教育学を学ぶため同センターへの研修をお願いしたところ、昭和 45 年に内地留学が許された。

能力開発工学センターでは、企業で働く技術者の養成を目的とした教育システムの開発チームに加えていただき、4 か月にわたり矢口所長より直接指導を受けることができた。特に、教育とは学習者が行動（表現行動ばかりでなく脳の働きも含む）を通して変容する場を意図的に設定することであり、「行動の変容＝能力の開発」であることを教えられ、そのための教材は学習者の行動を育てるシミュレータの役割を果たさなければならないことに気づかされた。

また、行動形成を目指す教育システムの作成は、脳科学に基いて工学的に行うべきであると諭され、「ベテランの行動や神経の使い方を分析（行動分析）し、それを基に教育内容や学習のプロセスを決定しなければならない」ことを学び、教育の改革に関する方向を示していただいた。

その後、私は工業高校や教育機関において、社会の進展に対応した職業教育や情報教育の充実を目指し、教員研修や新しい学習システムの作成及びシミュレータの開発に携わってきたが、それらは矢口氏はじめ能力開発工学センターの研究員の方々による教えの賜物である。

なお、氏の教育理論は、その後「創造する行動の育成」や「探究学習」へと発展し、企業内教育や学校教育に広く取り入れられるようになった。

★矢口 新（1913～1990 東京都）中央教育研究所研究員、国立教育研究所教育内容室室長

1951 年富山県総合開発計画・教育計画委員、以後富山県の教育計画の作成に指導的な役割を果たす。

1960 年頃より行動形成理論の教育観を提唱、プログラム学習の実践的研究と展開に努めた。

1968 年、能力開発工学に関する研究開発や普及・啓発および人材の育成を目的とした(財)能力開発工学センターを設立し、所長に就任。企業内教育の革新に努めた。

1960 年頃から矢口氏の指導の下に、プログラム学習が全国的に展開されるようになり、富山県においては 1962 年に個別化学習研究会が発足、県内の小・中・高等学校と連携しながら、プログラム学習を通して教育の体質改善が進められた。その後、その発展としての探究学習やコンピュータリテラシー学習の導入が図られた。

おわりに

以上、3 回にわたって「我が師」について記させていただいた。元より文才なく、先生方に対する感謝の気持ちを満足に表すこともできず、自叙伝のようになってしまったことをお許し願いたい。

今は亡き「我が師」の慈父のような笑顔が目に見え、ご冥福をお祈りします。

*2010～2012 年 能力開発工学センター理事

《《《 JADEC からのお知らせ 》》》》

JADEC 能力開発工学センターは、このほど長年住み慣れた東久留米市八幡町から、2.5 kmほど北の埼玉県新座市に事務所を移転しました。10 年ほど前から矢口文庫として、能開創設者である矢口新の蔵書や著作を集め保存管理していたところで、矢口教育学研究会の活動拠点でもあります。今後、連携した活動ができることを期待しています。

7階建てマンションの6階、西は秩父の山並み、北に赤木、榛名、東には筑波山、そして東南にはスカイツリーと、眺めの良いところです。お近くにおいでの際は折はお立ち寄りください。

《新住所・電話》

〒352-0032
埼玉県新座市新堀 2-1-7-603
TEL : 042-497-8024
FAX : 042-497-8044

《アクセス》

池袋より西武池袋線、清瀬駅下車
北口から徒歩約 10 分
ファミネス清瀬 603 号室



----- 今年度もよろしくお願ひします -----

【役員】

理事長 沖村憲樹 (独) 科学技術振興機構特別顧問
常務理事 中村 章 (株) 産業社会研究センター代表取締役
理事 小澤秀子 (財) 能力開発工学センター
矢口哲郎 (財) 能力開発工学センター研究開発部長
佐々木秀樹 (株) 記録映画社代表取締役
米澤崇夫 元(株) 徳倉製造部長/工場長
監事 岡部守男 (財) 日本視聴覚教育協会常務理事

【評議員】

芝尾紘一 元(株) エー・アイ・イー研究社代表取締役
関口一郎 (社) 日本教育工学振興会顧問
沼口 博 大東文化大学教育学科教授



《編集後記》 今号に当センターの創設者である矢口新についての研究で博士号を取った越川さんの著作を紹介できたことを本当に嬉しく思っています。7年前「矢口新についての資料を探しています」という一本の電話から始まった越川さんとのおつき合い。精力的な研究ぶりからは想像もつかない、どこか一本抜けたような愉快な人柄で、楽しい研究のお手伝いでした。研究はまだまだ続くようです。
M.Y.

一般財団法人能力開発工学センター

〒352-0032 埼玉県新座市新堀 2-1-7-603
TEL : 042-497-8024 / FAX : 042-497-8044

<http://www.jadec.or.jp/>
E-mail : info@jadec.or.jp